

牧会 / 社会 / 神学

第5回 日本伝道会議の論点 ⑧

日本における宣教は、西洋文化にいったん土着したものが、日本文化と対立する形でなされてきた。こうした、従来の福音宣教では、日本人の心に響き、魂に届くものとなつてこなかったという深刻な反省は、今まで何度も取り上げられたのである。しかし、問題提起がなされても、この問題を掘り下げ、伝道教会の現場において本気で取り組んできたのだろうか。宣教150周年を迎える今、日本宣教をその根本から問い直す時に来ている。

宣教と文化は どう関わるのか

まず、宣教と文化とがどのように関係しているのかを改めて問う。宣教師として長年インドで働いた宣教学者L・ニュービギンは、「文化的色彩を帯びない純粋な福音を取り出せる」という考えは幻想であり、福音の放棄で「すらある」(13頁)として、受肉のキリストによってもたらされた福音は、文化の中に存在する人間の現実そのものに深く関わっている、と指摘している。主が神から遣わされたとき、それはある特定の文化や社会の個性や限界性を帯びることをいとわず、むしろそのただ中で神の福音を伝え、そこに神の国が完成を目指

して始動したのである。ところで、福音宣教は、文化を変革することが第一義的なことなのである。むしろ、その文化の中に生きる人々がまず変革されることから始まり、変革された人々が神の民として形成される中で、徐々に新しい文化が創られていくのではないだろうか。その新しい文化は、その周りの文化とは似て非なるもので、その中心に導かれると、主のみが崇められる真の礼拝へと招かれていく。包括的福音を「理解」にとどめることなく共同体形成の中で実践するとき、そこには新しい文化の創造が伴うはずである。

日本において「葬儀」とどう取り組むか

福音と文化のダイナミックで創造的な関係を築くために、実際には何が必要なのであるか。私たちは、福音と文化を抽出してその関係を論じるのではなく、むしろ、聖書における神の民の形成がそうであったように、現実の生活の具体的な場面に入り込んでそのただ中で考えることを重視したい。そのために選んだテーマは通過儀礼であり、初日には葬儀に焦点を当て、生きること、死ぬこと、これは実に文化と関係が深い、すべての

日本人の心に響き、魂に届く福音宣教とは

魂に刻む葬儀の重要性は、文化的創造の営みへと私たちを駆り立ててきた。確かに日本の葬送儀礼には、死者と死霊を崇拝する偶像礼拝という決して無視できない課題がある。こうした信仰の戦いの中で、同時に取り組むべきことは、福音によって贈られた私たちが、全く新しい特別な意味のある葬儀を創り出すことではないだろうか。この課題について、伝道大学で専門に学んでこられた大和昌平氏(東京基督教大学准教授)が発表する。また、関連の分科会では、この課題に教会牧会の現場で長年取り組んでこられた上浦めぐみ教会牧師の清野勝男氏が「日本人の心に届く福音宣教―葬儀の取り組みにみる宣教の実際」を発表する。

旧約の通過儀礼と神道の通過儀礼

2日目は聖書に立ち戻って考察する。旧約における神の民の形成では、割礼が重要な意味をもっている。それは、アブラハムと主との契約に基づいて制定されたもので、8日目に施す誕生の通過儀礼として位置づけられる。そこでは金で買った奴隷も在留異国人も割礼を受けることができた。異邦人にも開かれた共同体への入会の通過儀礼でもある(出エジプト12・43〜49)。しかも、割

りに与ることができ、共同体のナラティブに参与するのである。こうした旧約の通過儀礼が具体的にどのよう神の民の形成に関わっているかについては、旧約が専門の鎌野直人氏(日本イエス・キリスト教団名谷教会牧師、関西聖書神学校講師)が担当する。

また、皇學館大学で学ばれた高桑照雄氏(単立創愛キリスト教会牧師、「いのちありがたの会」事務局長)が、日本において通過儀礼と共同体形成に貢献してきた神道に焦点を当てる。死とその後の一連の儀礼には仏教が、七五三をはじめこの地上における儀礼や主な地域共同体の祭りは神道が受け持ってきた。儀礼や祭りにおいて表現されてその伝統文化のあり方は、日本人の深い部分を形成し、無意識の郷愁とすらなっている。近代化によって人々が分断化され、儀礼の豊かな意味と地域の共同体性が失われつつある中、伝統文化への復古が具体的な形で現れつつある。だからこそ私たちは神道に学びつつ、それを超え、似て非なる共同体、神の民としての礼拝共同体の形成に向けて、具体的な一歩を踏み出すことを心から願っている。(西岡義行「日本文化と宣教」プロジェクトリーダー、東京ミッション研究所総主事、東京聖書学院教授)

教会が教会であるために

精神障害と教会

56

「和解の時代」



今回は、相談というよりも、適切な健康管理によって、躁うつ病を経験しながら落ち着いた生活を振り返りながら経験談を寄せていた女性から経験談を寄せていただきましたので紹介します。その方は、現在も通院され、薬も服用しながら仕事も普通にならしておられるとのこと。

しかし、そこまで行くには、いろいろと紆余曲折があったようです。10代の時から教会に通い洗礼も受けたのですが、社会に出られてから一時教会生活から離れた結婚、出産、離婚、そして病気を経験されたようです。自分のことを母には理解してもらえないと思いい、怒りが爆発することも度々ありました」と書かれています。いろいろな葛藤することが多い生活の中で、両親が信仰に導かれ洗礼を受ける一お父様が病床洗礼を受け、翌週、天に召されたことの中で、「心の重荷が軽くなったように思います」とその経験を綴っておられます。

実際には、この文章の中には、書き切れないような幾多の辛い体験も数多くあったことと思います。私が受け止めたメッセージは「和解」ということです。実はすべての家が、今から17年前に出版した「へてるの家」という関係者がべるとの出会いを綴った「へてる

「病気も回復を求めてる」

「和解の時代」とは、この家の「本」のサブタイトルが「和解の時代」となりました。このサブタイトルには、精神障害からの回復という課題の根底には、自己との和解、他者との和解、人生との和解、そして、神との和解という大きなテーマが横たわっているという思いがあったからです。なぜなら、精神障害とは、「間」に生じるジレンマであり、困難だからです。今回、経験を寄せていただいた方も、親子という「間」や夫婦という「間」の危機を通じて、見失いがちな、誰しもが抱えている人生に横たわる深淵を垣間見たような絶望感を抱かれたのかもかもしれません。あらゆることと敵対的な関係に陥り、孤立無援だと感じたとき、躁うつ病という病気の「スイッチ」が入ったといえます。

そこでべてるでは、「病気も回復を求めてる」と考えます。つまり、「病気が自分の生活を邪魔している」「病気がえなかつたら」の生き方ではなく、自分が「病気の足を引っぱらない生き方や暮らし方」を見いだす点に着目します。

それは、病気や症状のシグナルは、私たちが回復し和解に向かわせようとする大切な身体のメッセージだと考えるからです。その意味で、和解というのは「病気の」と「間」にも必要なのです。

第17回 KOSTA-JAPAN

日韓共同 Summer Camp 開催

テーマ イエスの平和を世に伝えよう!

日時 2009年8月11日(火)~14日(金)

場所 「伊那スキーリゾート」長野県伊那市西春近字細ヶ谷3390

登録費 学生12,000円 一般17,000円
中高生 7,000円 小学生 5,000円

プログラム	11日(火)	12日(水)	13日(木)	14日(金)
	モーニング・チャペル			
	朝食			
	Christian Life 1	Christian Life 3	Bible ③	
	Bible ①	Bible ②	閉会礼拝	
受付	昼食			
開会礼拝	セミナー1	セミナー3		
特別講義1	セミナー2	セミナー4		
	夕食			
Gospel Time	Summer Festival	Gospel Time		
特別講義2	Christian Life 2	特別講義3		
聖会1	聖会2	聖会3		
森の音楽会、花火	Group Meeting	Camp Fire		

講師
峯野龍弘師 (淀橋教会)
洪正吉師 (南ソウル恵み教会)
金圭東師 (ヨハン東京キリスト教会)
申ギヒョン師 (イハン教会)
大友幸一師 (塩釜聖書バプテスト教会)
韓允奉教授 (全北大学)
金ソニル長老 (作家)

問い合わせ・申込み(事務局)
(参加者の人数により参加が制限される場合があります)
〒169-0074 東京都新宿区北新宿4-30-2
TEL.03-5338-6411 FAX.03-5338-6414